

(2) 活動の経緯と目的

活動の経緯

●活動の開始 (1991年)

1991年3月、千里緑地に隣接する雑木林が開発される際に、その保全の提案を契機に当会が結成された。この時は、開発用地内の大木を中心に26本の木が移植され、雑木林奥の水場を壊さないよう、設計図が変更された。以後、開発計画がある度に保全の提案と話し合いを重ねてきている。

●自然観察会活動 (1991～1998年)

身近に残された自然に親しみ学ぼうと、近隣の小中学生や住民に呼びかけ、毎月定例の自然観察会(とよなか自然ウォッチング)を催してきた。季節を違え、様々なテーマで観察を続ける中で、タヌキのため糞やカヤネズミの巣を発見したり、多くの種類の野鳥や昆虫がこの山に寄り添い、養われていることを知った。

●竹間伐と雑木林再生の活動 (1999～2003年)

島熊山尾根筋より千里ニュータウン側は保全緑地として残されているが、反対側は開発可能なため、マンション建設等で森がなくなり、動物の棲息範囲は狭まる一方である。毎年秋には、千里緑地を分断する自動車道路でタヌキやホンダイタチの交通事故死が報告されるようになった。また、餌場が少なくなったタヌキやキツネは人家にも現れるようになってきている。

加えて、雑木林内にモウソウチクが侵食・拡大し、他の木を枯らし単一な植生へと変化している。タヌキやキツネなど従来の動物たちが棲みよい、もとの豊かな雑木林の復元を目指して、毎月竹間伐の活動を続けている。

●清掃活動とクズ刈り・ササ刈り (1991～2003年)

道路から捨てられる空き缶や煙草の吸殻などを毎月清掃している。同じ時にアカマツ等に絡みついて弱らせてしまうクズ刈りと林床のササ刈りも行っている。

活動の目的

今回の竹間伐作業の目的は次の2点である

- ①3ヶ月で成長してしまう竹は他の木の樹幹を覆い、光を独り占めし、竹以外の木を枯らしてしまう。成長した竹を測定してみると節は77節、全長18メートル、重量約52キログラムである。雑木林を構成する他の木は5年経っても1メートルに満たないものが殆どである。新しい実生が生まれても、光が当たらず、大きくなることができないので一方的に竹が増殖するばかりである。現在作業を行っている林も、暗い林内に残されている木は竹の上背を越す大木のみで、それらも光が届く上部だけに葉が繁り、途中に枝葉をつけていない不安定な状態である。

全国的にも里山での竹林の拡大は著しく、雑木林やスギ・ヒノキ林がモウソウチク林に置き換えられつつある。単一な植生にはそれを好む昆虫や野鳥しか生息できない。より多くの種類の昆虫や野鳥、哺乳動物を養うために、より多くの種類の植物で構成される雑木林の再生に着手した。生き物たちが賑わう豊かな森として保全していくために、モウソウチクを間伐し、もとの雑木林へと復元を図る。

- ②千里ニュータウン外周緑地は、現在保全緑地である。しかし一部で竹林化が進み、暗

く密生した状態となっている。住民にとって親しみが持てない自然は、開発対象になりやすく、また犯罪が起こる可能性もあるということで他用途へ変更という事態も起きてくる。景観上からも美しく、自然の豊かさを実感できる森であることで、将来的に市民の財産として保全しやすい。

③車にはねられ亡くなった
雄タヌキ



④タヌキやキツネの交通事故死を防ぐため「タヌキ横断注意」の看板を市に立ててもらおう



⑤自動車道側から見た現場
モウソウチクが繁茂し、
暗い林となっている

